

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 7 月 26 日現在

機関番号：32701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520321

研究課題名(和文) トロロプの旅行記における政治思想とリアリズムの研究

研究課題名(英文) A study of the political thought and realism in Trollope's travel books

研究代表者

委文 光太郎 (SHITORI, Kotaro)

麻布大学・獣医学部・准教授

研究者番号：70367241

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ヴィクトリア朝を代表する小説家の一人であるアントニー・トロロプのすべての旅行記を取り上げて、自筆原稿や作業日誌もあわせて検討しながら、彼の労働観を中心に考察した。その結果、「労働が文明化に通じるただ一つの道である」と繰り返し主張する一方で、トロロプが労働に潜む負の側面も明確に認識していたことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study has explored mainly Trollope's view of labor in his travel books. By analyzing not only the books but also the autograph manuscripts and the working diaries, it turned out that Trollope fully recognized the negative side of labor while insisting repeatedly that "work alone will civilize" the black people.

研究分野：人文学

キーワード：英米文学 アントニー・トロロプ

1. 研究開始当初の背景

ヴィクトリア朝を代表する小説家の一人であるアントニー・トロロプ(1815-82)は、架空の州を舞台とする連作小説が有名で、常にそのリアリズムの手法に研究者の注目が集まっている。しかし、そのリアリズムの手法が称賛される一方で、彼の小説における政治的あるいは哲学的思想の物足りなさも指摘されている。そうした批判は的外れとは言えないが、旅行記をはじめとする彼のノンフィクション作品には、とりわけ政治や人種に関する忌憚のない意見が数多く記されている。そのため旅行記の分析は、今やトロロプという作家の全貌を語る上で無視できない研究テーマとなっている。

これまでに私は、アイルランドを舞台とする彼の複数の小説を分析して、トロロプがアイルランド人に対して持つイメージを明らかにした。当時、郵政監察官補佐という立場にあった彼のアイルランドに対する眼差しは、実に心温まるものであったが、それと同時に、役人としての公的な立場と私的な立場との間で常に揺れ動いてもいた。こうした眼差しは、彼の人生に様々な幸運をもたらしてくれたアイルランドだけに限定されるものなのだろうか。この疑問が当該研究の着想の出発点となった。

なお、この分野に関連する近年の国内外の研究には特筆すべきものはないのが現状である。確かに、彼の旅行記を単体で取り上げて考察する研究は一部存在するが、すべてを取り上げた上でその全体像を提示した研究は、私の知る限り行われていない。その意味で、本研究の重要性ならびに独創性は十分にあるものと思われた。そこで、当該研究課題を申請することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、鋭い観察眼で上流階級の有様をつぶさに描いたアントニー・トロロプの数ある作品の中でも、これまであまり研究対象とされることのなかった4つの旅行記すべてに焦点を当てて、その全体像を提示することにある。

具体的には、科学研究費の交付を受ける4年の間に、『西インド諸島とカリブ海沿岸地域』(1859)、『北アメリカ』(1862)、『オーストラリアとニュージーランド』(1873)、そして『南アフリカ』(1878)の各旅行記を、海外の図書館に所蔵されている自筆原稿や作業日誌などと照らし合わせながら詳細に分析し、4つの旅行記の中で一貫して描かれているトロロプの労働観や人種観を明らかにする。

3. 研究の方法

研究対象となる作品を、海外の図書館に所蔵されている自筆原稿や作業日誌などと詳細に照らし合わせながら、分析と考察を行う。

4. 研究成果

本研究期間内に、トロロプの4つの旅行記を取り上げて作品分析を行った。詳しくは以下の通り。

(1) 『北アメリカ』を取り上げて、英国人である彼が当時のアメリカ人をどのように分析・評価しているのかについて考察した。その結果、アメリカ人の性格や行動などについて言及する際、それが否定的な意見であっても、直後に必ず肯定的な一面を書き加えることなどによって、彼がアメリカ人の反感を可能な限り抑え込もうと意図していたことがわかった。これは、それ以前に書かれていたトロロプの母フランセスの『内側から見たアメリカ人の習俗』(1832)や、チャールズ・ディケンズの『アメリカ紀行』(1842)の描き方とは明らかに一線を画すものである。そこで、なぜ彼はアメリカ人の反感を恐れたのかという点に着目して、本旅行記を改めて詳細に分析したところ、当初予想していた以上に、アメリカが文学作品の市場として魅力的な場所であることをトロロプが現地で感じ取っていたことが判明した。アメリカ人に対する彼の見方は、「誠実な評価」の結果であると指摘する研究者もいるが、必ずしもそうであるとは言いきれない。そこには、少しでも多くのアメリカの人々に自分の作品を読んでもらいたいという、著者としてある種当然とも言える欲求が確実に存在していたのである。この視点は、トロロプがアメリカという土地やその国民を当時どのように見ていたのかを理解する上で重要なものであると思われるので、今後、論文の一部として使用していきたいと考えている。

(2) 『北アメリカ』を取り上げて、国際著作権問題という観点から分析した。この問題への取り組みに関してはディケンズが有名であるが、実はトロロプも国際著作権問題の解決に向け、長年にわたり熱心な活動を展開していた。そこで、この問題に初めて言及した『北アメリカ』、1866年に書かれた国際著作権法に関する彼の論文、複数の手紙、さらに『自伝』(1883)を取り上げて、国際著作権問題に対する彼の考えを時系列に沿って考察した。その結果、アメリカの政治家に対する批判に変化が見られたり、当初は責任の一端を負わせていたアメリカ国民を後に称賛したりというように、彼の発言内容の一部が修正されてはいたものの、英米両国にとって国際著作権法は必要不可欠であるという彼の信念は、揺るぎないものであったことが明ら

かとなった。これまでのところ、トロロブの国際著作権問題への取り組みを長期的な視点に立って論じたものはないため、こうした事実は彼の人物像を理解する上で重要なものと言える。そこで、この研究成果を「トロロブと国際著作権問題」(『英米文化』第44号)として論文にまとめ投稿した。

(3) 『西インド諸島とカリブ海沿岸地域』を取り上げて、労働という観点から作品分析を行った。その結果、トロロブは各地域の黒人の労働状況を詳しく観察した上で、興味深いことに、労働によってもたらされた知性が、傲慢さという負の側面を黒人の中に芽生えさせていることを指摘していたことが明らかとなった。そして、こうした黒人の姿は、多少の報酬や威厳を手にした代わりに、かつて持っていた愛情の深さや他人を信頼する心を失ってしまった『北アメリカ』に登場するアイルランド移民に重ね合わせることができると判明した。さらに『北アメリカ』の最終章には、トロロブが帰国途中に燃料補給のため寄港したアイルランドの港で、多くの物乞いに取り囲まれる様子が描かれているのだが、労働による負の影響を一切受けていないその物乞いたちの姿は、西インド諸島の黒人やアイルランド移民とはまさに対極にあることから、このアイルランドの物乞いたちは、『北アメリカ』と『西インド諸島とカリブ海沿岸地域』で指摘された、労働に潜む負の側面を想起させる象徴的な存在として機能していることがわかった。なお、この研究成果は労働に対するトロロブの考えを理解する上で重要なものであると考えられるので、今後、論文の一部として使用していきたいと考えている。

(4) 『オーストラリアとニュージーランド』を取り上げて、原住民であるアボリジニに関する記述に焦点を当てた。『オーストラリアとニュージーランド』は他の旅行記とは大きく異なり、英国人に向けた移住指南書としての側面が色濃く反映された作品であったにも関わらず、かつて英国人入植者が原住民に対して行った非道行為の数々が具体的に記述されている。英国による帝国主義を支持していたトロロブが、そのような過去の歴史を本旅行記の中であえて描いた理由を考察した結果、原住民に関して何の知識も持たない英国人移住希望者の移住が失敗に終わらぬように、トロロブが熟慮を重ねた結果であったことがわかった。なお、この研究成果はトロロブの人種観を理解する上で重要なものであると考えられるので、今後、論文の一部として使用していきたいと考えている。

(5) 『南アフリカ』を取り上げて、労働という観点から分析を行った。他の旅行記と同じように、「労働が文明化に通じるただ一つの道である」という主張がなされている一方で、南アフリカにおける成功事例として紹介さ

れているダイヤモンドの採掘という仕事に対して、トロロブが批判的な立場を取っていることが明らかとなった。これは『オーストラリアとニュージーランド』の中で、トロロブが移住希望者に対して金鉱の採掘を仕事にするべきではないと繰り返し助言していたことに重ね合わせることができる。さらに、「労働がすべて善であるとは限らない」という彼のこの考えは、『西インド諸島とカリブ海沿岸地域』と『北アメリカ』の作品分析で明らかになった「労働に潜む負の側面」に通じるものである。つまり、4つの旅行記を執筆するためにトロロブが実際に現地を訪れて手にしたものは、白人による文明化の使命が声高に叫ばれていた当時の状況の最中、最も重視されるべき労働にも看過できない問題が潜んでいるという彼独自の鋭い視点だったのである。なおこの研究成果は、トロロブの旅行記全体を考察する上で重要なものであると考えられるため、現在、論文としてまとめている段階である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

委文光太郎、「トロロブと国際著作権問題」、『英米文化』第44号、2014年、39-54頁、
査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009810873>

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

委文 光太郎 (SHITORI KOTARO)

麻布大学・獣医学部・准教授

研究者番号：70367241

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：